

# Separation

—きみが還る場所

市川拓司 Takuji Ichikawa



アルファポリス文庫

それでも、  
ずっとぼくのそばから離れずにいてくれた  
きみに

1

そう、とにかく、記憶の初めにあるのは、彼女のブラウスを透かして見えていた、下着のあざやかな白さだった。

出会いから語ろうとすると、どうしてもこの記憶から始めなくてはならない。

15の彼女は一切の虚飾をそぎおとした、とても簡潔なからだつきをした、どちらかと言えば控えめな印象の少女だった。

入学式が終わり、教室に集められた新生生たちは、便宜的に男女の区別無く名前の順で席をふりわけられていった。五十嵐の次が井上ということで、必然的にぼくは彼女の後ろの席に座ることになった。目の前には彼女の薄い背中があった。

暖かい陽気のせいだったのか、それとも他に理由があったのかはわからないが、その時彼女は上着やベストをはおることなく、白いブラウス一枚の姿だった。

ぼくは彼女の首の細さや思春期前の子供のような、ひどく華奢な身体の曲線に目を奪われた。

そして、彼女がその胸をおおうための小さな下着をつけていることに気付き、何だか奇妙な違和感を覚えた。

それは、白いキャンバスに紅いインクを落としたような印象をぼくに与えた。(実際には青みがかったブラウスを透かして見えていたのは真っ白な下着の色だったのだけだ)

15という年頃の彼女の中の両義性にぼくは戸惑いを覚え、そして、それが後に二人を近づける最初の契機になったのかもしれない。

のちに、裕子にそのことを話すと、彼女はひどく曖昧な笑みでぼくをみた。

確かに、15の私にあの下着は必要なかったけれど、他の女の子と違うものを身につけるのは恥ずかしかったし、誰だつてあの年頃は背伸びをしたがるものだし――

でも、と彼女は続けて、

そんな私の内面まで見透かされたようで、もしあの時、井上くんがそのことを告げていたら、私は次の日から学校に行くことをやめていたかもしれない――

ぼくは、何も言わなくて良かったと、そのとき、内心胸をなでおろしていた。ぼくは

人の心のありようを理解することが下手なために、心ない言動で、知らぬ間によく他人を傷つけていたから。

そうやってぼくらは出会ったわけだけど、それから随分と長い間、彼女はぼくの中では無垢の肉体に背伸びをした装飾という、ちぐはぐなイメージで括られたごくささやかな存在に留まっていた。

彼女は入学して間もなく全国的にも名門と言われている、うちの学校の新体操部に入部し、それから少し遅れてぼくは陸上部に(こちらは20年ぐらい遅ればインターハイ優勝者もいるけど、今はその存続すら危うい、という弱小クラブだった)入部することになった。

おたがい、資質には恵まれていたんだと思う。

彼女は信じられないほど細い躯に、ぼくの手の中に隠れてしまうぐらいの小さな頭という身体的優位性と、たいていのライバルよりは高く跳ぶことが出来る強靱な脚を持っていた。

ぼくは敏捷性と持久性という一見相反する二つの能力を、森の民と野の民である遠い御先祖さまからそれぞれ受け継いでいた。

そんなわけで、ぼくらは2年の秋にはすでに二人とも県下では3本の指に入るほどの

選手になっていた。そうなるとはくらは、いかに速とか、いかにしなやかとか、いかに正確とか、そんなことで頭を一杯にして、他のことは殆ど眼に入らない日々を送るようになる。ぼくらは3年間クラスが一緒だったけれど、互いの存在を意識しあう接触の機会というのは、本当にごく僅かでした。

例えば、ぼくらは同じ路線のバスを使って通学していたけれど、二人が同じバスに乗り合やすのは、クラブ活動が休止となる試験期間に限られていた。

普段の朝、彼女は始発のバスに乗って学校に向かう。クラブの早朝練習に参加するためだ。実にそれから2時間以上遅れて、ぼくが同じバス停に現れる。他の生徒たちは皆、そのあいだのどこかでバスに乗り込んでいく。

ぼくがこれほど遅い時間を選んでいたのは、つまるところ、あのクラスメートたちでゴったがえす車内の喧噪が、うんざりするほど嫌いだっただからだ。

ぼくと同じぐらい（あるいはそれ以上に）人嫌いと標榜されるクラスメートの女子と二人きりの貸し切りバスに乗って、ぼくは毎朝学校に通っていた。

彼女がバスの一番前。そしてぼくが一番後ろ。

当然、教室に辿り着く頃には一限目の授業が始まっていたが、それをうるさく言うような野暮な教師はうちの学校にはいなかった。ただ、彼らは何も言わず、学期末の評価にちよっと手を加えるだけだ。

なかなか上品なやり口だと思う。

ぼくは夜間クラスの生徒が置いていった室内履きに履き替え、先輩から譲り受けた教師用の教材を教科書代わりに机の上に広げ、それからおもむろに30分遅れの始業のベルを胸の中で響かせるのだった。

教育テレビのパペット人形のような教師たちの授業は、おそろしく退屈で、それはツエツエ蠅以上の導眠効果をぼくらにもたらした。だから、午後の授業はたいがい自主休講にして陸上部の部室で一人、シリトーやファウルズといった、ぼくの好きな英国の作家たちの作品を読んで過ごしていた。

各教科の教師たちは、ぼくの不在の理由をきまって裕子に訊ねた。

不運なことに、3年間、彼女は殆どぼくの前の席に座って過ごすことになる。

教師たちはその事実と共に、のちの二人の関係を予見するかのように、彼女がぼくのお目付役であると勝手に決め込んでいるようだった。

もちろん、裕子はぼくの居場所を知るわけもなく、ただいつも教師たちの問いに当惑の表情を見せ、「わかりません」と答えるしかなかった。そのやりとりは3年間、幾度となく繰り返され、彼女の中で「いのうえ」という名と「わかりません」という言葉はひと括りで囲われるようになっていった。

実際、この頃のぼくらは互いのことを微塵もわかり合っていなかった。

彼女は多くの居場所を見失い、ぼくはただ、彼女の白い下着だけしか見ていなかったのだから。

やがて3年になり、ほんの少しの悔恨と、可能性という言い訳を胸に高校での競技生活を終えたぼくは、受験生というネームタグの付いたひどく窮屈な服を着せられ、退屈な日々の中に埋没していくことになる。

それでもぼくは、走るための時間を犠牲にするつもりはなからなかった。

ぼくにとって走ることは息をすることと同じくらい自然で、しかも不可欠な要素だったから。

限られた時間の中で最大効率をひきだすために、受験のための参考書は4冊だけに絞ることにした。つまり、英単語、英熟語、古典、漢文の4冊だ。経済的だし、シンプルでぼくの性にあっていて。社会はいつさい手をつけないことにした。本番では択一の問題に超常的な感覚を発揮して、確率以上の正解数をたたきだすつもりでいた。

一度だけ試しに受けてみた全国模試では、英語と国語は全受験者の上位5%に入る上々な結果となった。もつとも社会は例の超常感覚は不発に終わり、不吉な成績を記していた。平均すればごく平凡な成績に落ち着いたが、おおむね自分の勉強法が間違っていないかったということを、この模試で確認することが出来た。

この極めて効率的な勉強法のおかげで、充分すぎるほどの自由な時間を手に入れたば

くは、思う存分走ることに、その余白を割り当てることが出来た。

グラウンドにはもうすでに3年生がいる場所はなかった。だからぼくは、学校からさほど遠くない距離にある自然公園の中に走る場所を求めた。

その日もぼくは学校の授業が終わると、自転車に乗って自然公園に向かった。

運命的必然かというと、何やら後知恵めいて聞こえるけど、のちに振り返ってみれば、やはりあの日ばかりは出会うべくして出会ったのだと思うことが出来ると思う。

ぼくがいつもは使わない近道（国立大学のキャンパス内を通り抜けるブルーバールート）を通ったのも、ジョン（彼女が飼っている耳だれに悩む老犬）が、公園の入り口に立つ案内板の支柱にいつもより長く執着をしめたのも、それは結局ふたりがそこで出会うための運命の呼び水だったのだということが――

ぼくは公園の入り口にある駐輪場の柵に自転車をつなぐと、軽くストレッチをしてから森に続く道を走りだした。秋色に染まる木々が風にこずえをそよがせ、まるで小さな子供が吹く口笛のような、ひゅー、ひゅーという音をたてていた。ぼくは、葉の隙間から零れ落ちる金色の光が舞う中をゆっくりとしたペースで走った。

やがて、小径の向こうに一人の少女の姿があらわれた。長い髪が風に揺れるその後ろ

姿は、何故かぼくをととても懐かしい気分にした。浅黄色のモスリンのパーカーにチェックのミニ。傍らにはひどくみすばらしい姿の犬が一匹いた。近付くにつれて懐かしい気分は、より明確な既視感へと変わっていった。その理由もわからないまま、ぼくは胸の鼓動が速まるのを感じた。

さらにもう2、3歩すすんだところで、ぼくの気配に気付いたのか、少女がゆっくりと振り返った。

そして彼女は言った。

「こんにちは井上くん」

ひどく間の抜けたことに、ぼくはその時、この少女が誰なのか気付かずじつにいた。自分の名を呼ぶ見知らぬ女の子に、ぼくはどきまぎしていた。彼女は不思議そうな顔でぼくを見ている。

不器用な沈黙の重さに、ぼくは胸苦しさを覚えた。

視線を合わすのが恥ずかしかったので、ぼくはチェックのミニからすらりと伸びた白い脚をじつと見ていた。雲間から地上に届く光にも似て、その脚はなめらかで、とても直線的だった。ある意味、この年頃の女の子にあるべき性的な要素がすっぽりと欠落している感じもした。

——イノセンス——

そして、ぼくは彼女が誰であるのか唐突に気付いた。彼女が白いブラウスを着ていた

なら、すぐにも気付いたのにとぼくは思ったが、それを口にすることは無かった。

「こんにちは、五十嵐さん」とぼくは言った。

今にして思えば、この時こそが本当の意味での二人の出会いだったのかもしれない。決して交わることの無かった双曲線に、ビーナスの息子がちよつとした変数を書き加えたのだった。彼女はすごく可愛かったし、その可愛い女の子が自分の良く知っている身近な人間だったことが、よけいぼくを落ち着かない気分にした。

「走ることがすきなね」

そう彼女が言ったとき、ぼくはわけもなく顔を赤らめた。「すき」という言葉が彼女の細く、微かに震えるような声で語られたことに敏感に反応してしまったのだ。

「そう、すきだよ」

何だか告白しているような気がして、ぼくは急いで付け加えた。

「走ることがね」

「そう」と彼女が言った。

「私もすきよ」

ぼくははっとして彼女の顔を見た。

「ジョンとこの森を散歩することが——」

そう言って彼女は微笑んだ。

つまるところ、ぼくらは15で出会ったときから少しずつ惹かれ合っていたんだと思う。ただ、お互いそういう感情に不慣れだったものだから、それを持て余し、心の奥深い場所に重石をつけて沈めてしまったのだ。

「でも、なんで今までぼくらはこの森で出会わなかったのかな？」

ぼくが訊くと彼女は「そうね」と大きな目をしばたかせた。

「今日は少しだけ、いつもより公園の入り口にいる時間が長かったの」  
なるほど。

「ぼくは少しだけいつもより早く公園の入り口に着いたんだ」  
だとしたら、と彼女が言った。

「私たちはいつも少しだけすれ違っていたのね」  
そうみたいだね。

明日も今日みたいに少しだけながくあの場所にとどまってみようかしら——  
彼女がそう言ったとき、ぼくは胸の奥深くから何かが急速に浮かび上がってくるのを感じた。

そう——ありていに言って、ぼくはこの時、恋に落ちたのだった。

## 2

それから毎日のように二人は森で落ち合い、3年分の日々を取り戻すかのように夢中になって語り合った。

ぼくは狭い部屋の中で一人、暮らしてきたが、そつとドアを開け隣の部屋を訪ねてみたら、そこに彼女がいたのだと、そんなふうに感じていた。初めから二人はすぐ近くにいたのに、何とも遠回りをしてしまったものだ。廊下の向こうには、その先にも果てなく幾つものドアが続いていたが、そのいずれにもぼくは全く興味が無かった。一人より二人のほうが素晴らしいということはわかったけれど、かといって二人よりも三人のほうが居心地がいいかという、どう考えてもそれは有りそうにない話のようにぼくには感じられたから。

春はあつというまに來た。

何だかいつもよりも一ヶ月ぐらい早く4月になったように感じられたが、多分それはぼくの思い違いだったのだろう。

裕子は東京の短大に通うため、世田谷の寮に入るようになった。  
ぼくは結局、地元の教育大学に通うことにした。

試験科目が英語と国語のふたつだけだったからという、何とも実用主義的な理由で選んだわけだけど、ぼくは教師になるつもりは最初から無かった。それにも関わらず、ぼくは東京の私大の教育学部も受験していた。英、国はそこその出来だったが、社会は確率論の常識を超える信じがたい不正解率を記録し（ありのままを言えば、それは限りなく0点に近かった）、不合格となった。超常的な感覚はマイナスに作用したらしい。2校とも陸上部に伝統があるというのが、もう一つの受験の動機ではあったが、ぼくの不純な目的のために、未来の有能な教師が一人失われたのかもしれないと思うと、ぼくの胸はほんの少しだけ痛んだ。

結果的に二人は空間的に遠く引き離された形になってしまったけれど、それでもぼくらは出来る限りの機会を利用して共通の時間をつくりあげた。互いにアミニズム的素朴さで電話という存在を畏れていたから、二人の交信はもっぱら手紙にたよっていた。そのもどかしさから来る反動だったのかもしれないが、ぼくらは出逢う機会があれば、その度にあくまでも直截的なやりかたで相互理解しあうことに固執した。

率直にいつてしまえば、ぼくらはあまりに若く、しかも他の誰よりもしなやかで魅力的な肉体を持ち合わせてたので、どうしてもその存在を無視することが出来なかったのだ。

その頃の二人が写っているセルフポートレートが残っているけど、それはまるでカルバン・クラインの広告写真のようにも見える。ベッドの上で下着姿のふたりが、日溜まりの猫のようにくつろいでいる光景だが、そこに写る彼らはとても幸福そうな顔をしている。無邪気で好奇心に満ち、自分たちが踏み入れた新しい世界を眩しそうな眼で見つめている。

ただ、実際的には、そんなふうにくつろいだ時間を持つことはほんとにまれだった。会える日は月に一度か二度しかなく、しかも二人きりになれる場所はごく限られていた。家のものが運良く出払ってくれば、二人はぼくの部屋でゆつくりとセックスを楽しむことが出来たし、人の少ない公園ならば、ペッティングぐらいは可能だった。そして、深夜の駅のコンコースでネッキングをし、夕暮れの交差点で、信号を待つ間にぼくらはそっとキスをした。

ホテルに行くような金の持ち合わせは無かったけど（競技生活に打ち込む学生ほど貧乏な存在はいないから）、それでもぼくらは充分満ち足りていた。

ぼくらが無思慮で目の前にある多くのものを見逃していたとしても、それはしかたのないことだったと思う。だいたい、思慮深い10代の間が一体どれだけいるというのだ？ 肉体は限りなく高められ、あともう少し望めば空だって飛べそうな、そんな全能感に満たされているときに、その肉体こそが人生のくびきとなるなんてこと誰が思うだろう。

それは何の予兆も無しに訪れた。

— とうか、それから先も、ぼくにとって人生は不意打ちの連続だったんだけれど——  
 ひらたくいってしまえば、裕子は妊娠したんだということ。  
 ぼくらの避妊のやり方が拙く、不完全だったことは確かだが、それでもこんなにも容易く一つの生命がこの世に生じるなんて、ちよつと信じられない気持ちだった。豊穡な大地に慈雨のごとき命の水を注いでいながら、その行為の意味をぼくらは殆ど認識していなかったのだ。

計算でいくと、彼女は卒業式に破裂寸前の臨月の腹を抱えてのぞむことになる。それでも何とか卒業証書だけは手にすることが出来るだろうというのが、ぼくらの考えだった。卒業と同時に彼女は働き始め、赤ん坊の面倒は一切ぼくが見る。そして、多少順序は前後するが、ぼくが卒業したらすぐに二人は結婚する。それは可能なことのように思われたし、ぼくらは大真面目で、そのプランを練り上げたのだった。

しかし、妊娠の事実とともに、その計画を互いの両親に告げたとき、ぼくらの考えがいかに箱庭的で狭い視野に囚われていたのかということをお願い知らされることになる。ぼくらは自分たち二人の完結した世界の中だけで物事を考えていたので、他の人々との交わりや、社会の枠組みという概念をすっぽりと取り落としてしまっていたのだ。どちらの親も（特に裕子の両親は）子供を産むことには猛反対だった。早いうちに中絶することが最善の道だという。

親たちからその話が出るまで、ぼくら二人の間でその選択肢がとりざたされたことは

一度も無かった。ぼくらはその言葉の忌まわしい響きに青ざめ、冷酷な大人たちに徹底抗戦する構えでいた。彼らの武器は社会性だの常識だのモラルだのといった、そうそうたる重火器群だった。そしてぼくらといえば、本能に根差した熱情、非論理的な昂揚といった、徒手空拳かせいぜいが石つぶてのごとき貧弱な武器しか持ち合わせていなかった。それでも二人は民族自決を掲げるバルカン半島辺りの新興国家のように果敢に戦った。

だが、いつだってそうだった戦いの中で真の意味での被害者となるのは、非戦闘員である弱者なのだということを、ぼくらは教訓として思い知らされることとなる。

—— 失われたのは、生まれてくるはずのぼくらの赤ん坊だった。

まだ、安定期に入る前だったし、後の診断で裕子の子宮そのものにも原因の一端はあると説明されたが、なによりも諍いによる大きなストレスが、赤ん坊を死なせてしまったのだとぼくらは思っていた。

全てが終わったあと、病院のベッドに横たわり、裕子は瞳をうるませながらぼくに言った。

「ごめんね」

「あやまらなくてもいいよ」

ぼくは言った。

「ぼくよりも裕子のほうがもっと辛いんだから。もし、あやまるのなら、それは生まれてくるはずだった赤ちゃんに、ぼくら二人でごめんねと言おうよ——」

ぼくは裕子の手をとった。

「もっとみんなから望まれる形で、この世に送り出してあげることが出来れば良かったんだけど……」

そうね、と裕子は呟いた。

「ねえ——男の子だったのかしら、女の子だったのかしら、私たちの赤ちゃん」

「多分」とぼくは言った。

「女の子だったような気がする。足が速くて、高く跳ぶことが出来る、裕子によく似た女の子」

多分——そんな気がする。

「いつかまた、この子の生まれ変わりが私たちのもとに訪れるのよね？」

「そうだよ。だから、それまでのほんの少しの間のお別れなんだ」

この時の二人の会話を、ぼくはずいぶん後になって思い出すことになる。

そしてぼくは、二人が予見した未来と、目の前の現実との奇妙な相似性に気づき、目眩にも似たとまどいを感じたのだった。

この出来事は、ずっと先のぼくらの未来にまで冷たい影を落とすことになる。

彼女は新体操をやめ、ぼくもそれと同じころ身体をこわして競技生活から離れていく。親たちはぼくらの付き合いを禁じ、二人は以前にもまして共通の時を持つことに困難を感じていた。二人は別の名前で手紙を取り交わし、親たちの目から隠れるようにして、ささやかな交信を続けていた。

まだ、携帯電話も電子メールも一般的ではなかった時代だ。ハローと言って、答えが返ってくるのは一週間後。状況だけを見れば、ぼくらはまるで、地球と天王星の間で交信するアストロノーツみたいだった。ある意味、書簡だけが唯一の通信手段だった18世紀の恋人たちと、ぼくらはなんら変わりはなかったのだ。

やがて、彼女が短大を卒業し、地元のスポーツクラブに就職すると状況はそれよりも随分とましになった。仕事という大義名分があるおかげで、彼女は夜はかなり遅い時間まで自由に行動することが出来るようになった。

二人は人通りの絶えた夜の本通りを歩き、誰もいない陸上競技場のベンチで言葉を交わし合った。

ぼくは、この時期ひどく身体をこわして、地を這うような生活を送っていたので、彼女と過ごす時間だけが唯一の救いでもあった。

そうやって2年の年月が過ぎ、ぼくは大学を卒業した。

初めから決めていたとおり、ぼくは教師にはならず、隣町にある小さな司法書士事務所に就職した。

ぼくらは19の時交わしあった約束の通り、これを機会に結婚することにした。赤ん坊はいなくなってしまったけれど、彼女（彼？）が再び生まれ来る日のための場所をちゃんとつくっておきたかったのだ。

ぼくらが結婚すると告げたときの彼女の両親の激昂は凄まじいものがあつた。隠れていまだに付き合っていたことを厳しい口調で詰めり、ぼくを最低の人間だと断言した。ぼくの親たちは心情的には二人の結婚を受け入れたいという向きはあつたのだろうが、彼女の両親への気兼ねからか、それを口にすることはなかった。

もちろん、もろてを挙げて祝福されるとは思ってはいなかったけれど、これほどまでにはつきりと二人の結婚を否定されるともぼくらは思っていなかった。彼らの子供として傷つき、しかし結局、最後には生まれ来る自分たちの子供のために、ぼくらは自立する決心をしたのだった。

ぼくと裕子は二人の職場の中間地点に2LDKのアパートを借りた。

そして、ささやかな荷物を運び込んだその夜、小さな折り畳みのテーブルの上で、婚姻届に二人で署名し、ぼくらは夫婦となったのだった。

### 3

「ねえ、最近私瘦せたと思わない？」

裕子が言った。

ぼくはあらためてテーブル越しに彼女の顔を見た。

「どうかな？」

小さくかぶりを振りながらぼくは答えた。

「顔なんかは前よりもふっくらしてきたようにも見えるけど」

「そう？」

「うん」

ぼくは頷くと、再び皿の上のマリネにとりかかった。

店の中は静かだった。ごく控えめに奏でられる「夏の日恋」が静けさをさらに強調していた。

ぼくらは初めての結婚記念日を祝うために、アパートから10分ほど歩いたところにある国道沿いのイタリアンレストランに来ていた。客はまばらで、アルバイトのウェイターが所在なさげに佇み、ぼんやりと店の入り口を見つめていた。

「体重が減ったとか？」

ぼくは訊いてみた。

「わからない——最近、量ってないから」

彼女はフォークでクレソンをつつきながら答えた。

「でも、この頃どの服を着ても大きく感じるの。スカートなんか緩くて、ちょっと心許ない感じ」

ふむ、とぼくは考えてから、

「また、以前の体形に戻り始めたのかな？」

彼女は競技生活を続けていた頃は40kgそこそこの体重しかなかった。そして、それは妊娠、流産をきっかけに新体操をやめてからも、あまり変わらなかった。だが、結婚した頃から彼女は体重を徐々に増やし始め、現在は45kgほどになっていた。ひとつには、それは彼女の努力に負うところもあった。二人は子供を欲していたし、そのためには彼女はもう少し脂肪を付けて、妊娠に適した身体になる必要があった。

「いっしょうけんめい食べてるのに——」

溜息と共に吐いた言葉の裏には、なのに何故赤ちゃんが出来ないの？ というやるせない問いかけも孕<sup>はち</sup>んでいた。

ぼくらは失われた赤ん坊との再会を心待ちにしていた。何か、ぼくら二人だけでは未だ不完全のような気がしてならなかった。この心の中の虚ろな部分をぼくらの子供がきっと埋めてくれるのだと、二人はそんなふうに考えていた。親たちからは認められず、

式さえも挙げてはいなかったが、それでもぼくらは誰にも恥ずることの無いきちんとした夫婦だった。子供は堂々とこの世に産まれ来ればいい。

なのに——

「なかなか努力は報われないものね……」

彼女の言葉にぼくは、

「でも、肌のつやなんか最近すごくいい感じだよ。身体の調子自体はいいんじゃないかな？」

うん、と彼女は頷いた。

「何か、体の中にエネルギーが満ちてくる気分なの。もしかしたら、今こそが、その時なのかなって思ったりもするわ」

「つまりはさ」とぼくは人差し指を立てた。

「赤ん坊のほうが、ぼくらよりも思慮深いって事なのかもしれないね。ちゃんと生まれ出る時期をわかまえているんだよ」

ぼくらは、一緒に暮らし始めたその日から、一切の避妊をせずにセックスをしてきた。でも、振り返って考えてみれば、もし、あの頃彼女が妊娠してインストラクターの仕事をやめることになっていれば、ぼくらの生活はいきなり貧苦の色に染められていたこ

とだろう。ぼくは事務所ではまだ見習い扱いで、ほんの申し訳程度の給料しかもらえず、生活費の大半を彼女の収入に頼っていたのだから。しかし、この春大幅に昇給し、ぼくもやっと人並みの給料をもらえるようになった。僅かながら貯金もできたし、今ならば彼女が仕事を離れてもなんとかやっていける。

「そうね」

裕子が微笑みながら言った。

「何て賢い子なのかしら」

「ぼくらの子供だからね」

「そう?」

「そうさ」

「でも、あつという間の一年だったわ……」

店からの帰り道、国道沿いの歩道をぼくらは歩いてた。

こんな遅い時間でも絶え間なく行き交う車であたりは明るい。

「後悔してない?」

ぼくが訊くと、彼女はゆっくりとかぶりを振った。

「——お父さんやお母さんに会いたくはない?」

重ねて訊くと、

「大丈夫よ」

そう言つて、彼女は春の柔らかな風に舞う髪を、細い指でかき上げた。

「私はもう大人だもん。あの人たちが私の生き方を認めないというのなら、私もそう考えるあの人たちを認めるわけにはいかないのよ——」

そうじゃないと——と彼女は呟くように続けて、

「生まれてくる赤ちゃんにも申し訳ないでしょ?」

裕子は寂しげに微笑んだ。

「私たちの結婚は間違이었다という、お父さんたちの言葉に負けてしまったら、生まれてくる子供まで否定してしまうような気がして……」

彼女が精一杯、気を張って生きている姿は何処か痛々しく、時折、ぼくは言いようのない焦燥感にかられることがあった。

本当にぼくでいいのだろうか?

彼女にはもつと穏やかに、自然に生きていく道もあったんじゃないだろうか?

そんなことを思うと、ぼくは何かまわりの空気がすつと薄くなつてしまったような、そんな息苦しさを覚えるのだった。

その夜、素肌の彼女を抱きしめながらぼくは言った。

「本当だ。少し痩せたみたいだね」

彼女は飲み馴れないワインの余韻の中で、眠たげな眼をぼくに向けた。

「そう思う？」

「うん」

確かに彼女の腰の辺りの曲線が平坦になったような感じがした。

「赤ちゃん——」と彼女が呟いた。

「ちゃんと来てくれるかな？」

ぼくは彼女の滑らかな下腹部に手を添えた。

「大丈夫だよ」

ぼくはくすりと笑いながら、裕子の形の良いへその周りを指でなぞった。

「今頃、この辺りで競争しているんじゃないかな。みんな一等賞めざして」

そうね、と彼女は呟いて、小さなあくびを漏らした。

ぼくは彼女の隣に仰向けになると、薄暗い天井を見上げた。程なく、彼女の規則正しい寝息が聞こえてきた。毛布の下で彼女の胸が微かに上下している。

彼女の乳房が、以前よりもひとまわりほど小さくなったことは、やはり言わないでこう、とぼくは思った。15の頃の彼女の頑なな後ろ姿を想い、そう、あの頃に比べれば彼女の胸だって随分とふくよかになったのだから、そう自分に言い聞かせて。

## 4

ぼくは「思ひ出のグリーングラス」を口ずさみながら、夕食に添えるサラダを盛りつけていた。

ここ数日は一人きりの晩餐が続いている。

裕子はこの春にクラブを退職して、フリーランスのダンスインストラクターになっていた。収入は増えたけれど、その分、以前に比べて随分と遅い時間まで彼女は外に出ているようになった。ひるがえって、ぼくといえは、昨日と今日の区別も付かないような決まり切ったルーティンワークで、よほどイレギュラーな出来事が無い限り、毎日午後7時には家に帰り着いていた。だから、そんなぼくのために、裕子は昼の間に料理をつくり置いてから、仕事に出掛けるようにしてくれていた。

そして、今夜もまたぼくは一人、裕子が用意してくれた料理で1日の最後の食事にとりかかろうとしていた。

盛りつけたサラダをテーブルに運び、ぼくはグラスにミネラルウォーターを注いだ。

その時、ドアの外から耳慣れた足音が聞こえてきた。とん、とん、とんと階段を昇るそのステップは、何だか靴のCMの効果音に使いたくなるような響きだった。

ほどなくしてドアが開き、「ただいま」という裕子の声が玄関から聞こえてきた。心

なしか、いつもより元気がないように感じる。

「早かったね。9時からのクラスがあったんじゃないの？」

「早くが訊くとダイニングに入ってきた裕子は、

「うん、私の勘違いだった。今日は6時からスタッフのミーティングとフィジカルチェックになってたの」

大きなバッグを肩から降ろすと、ふう、と溜息を吐いて椅子に腰を下ろした。

「フィジカルチェック？」

「ええ」

彼女はミネラルウォーターで喉を潤し、やっとくつろいだ表情になった。

「フィットネスクラブっていうのは健康を売る商売でしょ？」

「そうだね」

「だから、スタッフにもそれが求められるのよ。定期的にフィジカルチェックを行って、みんなのヘルスコンシヤスネスを高めるのが狙いの」

ふうん、とぼくは頷き、

「それで？　どんなことをチェックするの？」

「まずは身体のあらゆるサイズを測って、前回の測定値と比べるの。ウエストなんかが増えたりすると査定に響くって噂もあるわ。それから体脂肪率を測って——あとは筋力の最大値とか、酸素摂取能力だとか、そんなもの」

裕子の結果はどうだったのと訊くと、彼女はふいに複雑な表情になった。

「私はもう社員じゃないから本当は必要ないんだけど——」

束の間言い淀んでから彼女は続けた。

「ちょっと気になっていたので、身体のサイズだけ測ってもらったの」

「うん」

「そしたら前回の測定より、全ての数値が低くなっていたの」

「やっぱり痩せたんだ」

彼女はううんとかぶりを振って、

「痩せただけじゃなくて、背まで低くなっちゃったの」

「背が？」

「ええ」

訊いてみると、今日の測定で彼女の身長は159.5cmという数字だったという。3ヶ月前、社員だったときに測った身長が161.5cm。2cm程小さくなっている。これを誤差の内と片づけることが出来るだろうか？

さらにバストは81cmから78cmに、ウエストは57cmから56cm、ヒップも84cmから82cmに、それぞれサイズが小さくなっていた。

「どうしたんだろう？」

裕子は泣き出す直前みたいな奇妙な笑みでぼくを見て、さあと首を振った。

「最近食欲は？」

「ぼくは訊いてみた。」

「変わらない。もしかしたら前よりもあるくらい……」

「そう」

たとえ食欲が落ちていたとしても、背が低くなる理由にはならない。

「ああ、でも——」と、ぼくは宙に浮いた記憶を読み取るように眼を細めた。

「そういえば、人間で痩せる時って足の裏の脂肪や筋肉も細るから、靴のサイズが小さくなったり、背も縮むことがあるって何処かで読んだ気がする」

不安にかげりの色を落としていた裕子の表情が、一瞬明るくなった。

「じゃあ、それかしら？」

「そうだよ、とぼくは彼女に微笑みかけ、

「仕事のリズムが変わって、その負担がやっぱり身体にあらわれてるんだ。これは、あんまり無理しちゃいけないっていう身体シグナルなんだよ」

「そうね。少しレッスンのコマ数、減らそうかしら——」

「そのほうがいいかもしれない」

「うん、考えてみる」

だが、それでも一抹の不安を拭いきれない彼女は、その日から毎日のサイズを測り、記録を付けてみることにするとぼくに告げたのだった。

それがいいかもしれない。

不安とは、その9割が頭の中で膨らんだ根拠のない妄想だ。はつきりとした数字で裏打ちされた事実さえあれば、そんなもの払拭出来るはずだ、その時のぼくはそう考えたのだった。

## 5

「高校の頃を思い出すわ」

裕子はそう言って気持ちよさそうに背伸びをした。

「あなたと、私と、そしてジョンと」

ぼくらは木々の隙間から降り注ぐ5月の光の中を歩いていた。

「元気にしてるかな？ 彼は」

「ぼくが言くと、裕子はくすりと笑って、

「彼ではなく、彼女よ」と訂正した。

「えっ？ だって、ジョンで名前——」

「でも彼女なの」

ジョン、ヨハン、ジョバンニ——日本だったらさしずめ、太郎といったところだろうか。

「私が名付け親なの」

「それは、それは——何とも無責任な名付け親だなあ」

でもね、と裕子は微笑み、

「その前に飼っていた犬も、やっぱりジョンで名前だったの」

「それはオス犬？」

うん、と彼女は頷いた。

「私がまだ小さかった頃に老衰で死んでしまったんだけど、父親が悲しんでいる私を慰めるために、貰ってきたくれたのが今のジョン」

裕子は遠い記憶を探るように、ゆっくりとした口調でほくに説明した。

「私はまだ幼かったから、その仔犬がきつとジョンの生まれ変わりなんだと思い込んでしまったのね。それで、ジョン、ジョンって当たり前のように呼ぶようになって——それがそのまま彼女の名前になってしまったの」

「生まれ変わるときに性別が入れ替わるなんてこと、あるのかなあ？」

「あるわよ、きつと。だって熊が栗鼠に生まれ変わることだってあるんだから。生まれ変わりに制約は無いのよ」

もし、そうならば——ほくは、一度くらい何かまるで今の自分とは別のもの——

そう、たとえばガラスで出来た砂時計とか、そんなものに生まれ変わってみたい気がする。

じつと、自分の軀の中を流れ落ちる砂の音に耳を澄ましながら、静かに時を刻んでい

く人生なんていうのも悪くないかもしれない。

「でも——」

裕子はふと、何かを考え込むように立ち止まり、憂うような眼差しでほくを見た。

「この世に生まれ出る前に死んでしまった赤ちゃんは、天国に行けないっていうのは本当かしら？」

「そんなことはないさ」

すかさずほくは言った。

「何で、そんなこと考えたの？」

「うん。だって、天国は生まれ変わる人たちが、自分たちの番が来るのを待ったための待合室みたいな場所なんでしょ？」

「そう？」

「ええ。だから、天国に行けない子供は、生まれ変わることも出来ないんじゃないかと思ってる……」

何故、彼女がこのようなことを言い出したのか、ほくにははっきりとはわからなかった。ただ、裕子が失われた子供に再び出逢うことを強く望んでいるのだという、その気持はほくにも痛いほどよくわかった。ほくらは生まれ来ることの無かった二人の赤ん坊を、あの時すでに深く愛し始めていたのだ。

あの子に逢いたい——その手を握り髪に触れたい——

二人の思いは一緒だった。

## 6

ほどなく、ぼくらは目的の場所にたどり着いた。

そこは高校生だった頃、毎日ぼくらが通った、森の一番深いところにある古びた東屋だった。

昼でも薄暗いこの場所で、ぼくらは光の子のように無邪気に言葉を交わし合い、キスを繰り返したのだった。

裕子は少し湿った匂いのする木のベンチに腰を下ろすと、バッグの中から編み物の道具を取り出した。彼女は何日か前から生まれ来る赤ん坊のために、小さな靴下を編み始めていた。まだ、妊娠の兆しもないのに、とぼくが笑うと、彼女は、

「でも、予感があるの。うまきは説明出来ないんだけど、私の軀の奥深い場所を誰かがノックしているような、そんな感じ」と言った。

日を数えると、多分生まれてくる頃は、未だ寒い季節のはずだからと、彼女はラズベ

リーピンクの毛糸で、ミニーの縫いぐるみにでも似合いそうな、本当にちっちゃな靴下を編んでいた。母性が時に見せる、こういった想像力の豊かさは、男であるぼくを不思議な思いにさせた。

ぼくはコットンの長袖のTシャツとランニングパンツという姿になると、その場でストレッチを始めた。

「でもさ」

ぼくは言った。

「何で、犬の一生って、あんなに短いのかな？」

2代目のジョンもすでに老境に在ることを思うと、ぼくは少しやるせない気持ちになった。

彼女は編み物の手を止めずに、少し考えるような仕種をしてからぼくに言った。

「犬は、人間ほど欲張りじゃないから」

「うん」

「あれもやりたい、これもやりたいって、そんなこと思わずに、ただ自分がこの世に生まれたことを素直に受け止めて、そのことだけで満足して静かに一生を終えていくからじゃないかしら？」

確かに、人間は欲張りだと思う。かくいうぼくだって、時折人生の短さを思っ悲し

い気分になるときがある。裕子に出逢うまではそんなこと考えはしなかったのだけれど、今は彼女と一緒に過ごせるときが、あと50年とか60年とか、それしかないことを何だかとても残念に思うのだ。きつと、それがたとえ100年とか200年とかだつて、同じように感じるのだらうけど。

「それじゃあ、行つて来るね」

「うん」

ぼくは裕子を東屋に残し、森の中へ走り出した。

一度は完全に離れてしまった世界だけれど、懐かしさに背中を押されるようにして、ぼくは再び少しずつ走らうようになっていた。

10歩も行かないうちに、ぼくはもう高校の頃の自分に戻っていた。あの頃かいだ匂いと柔らかな土の感触、そして綿毛のように舞う光の粒子たち、その全てが懐かしい。ぼくは17歳の春に向かって駆け出していた。

\*

時は戻らないというのは真実だ。

でも、人は記憶というものを巧みに使って、あたかも時間を遡ったかのように感じる

という、ちよつと気の利いた能力を持っている。そうやって、人は自分が過ごしてきた時間の中を自由に行き来して、薄味の人生にびりつとした香辛料を振りかけるのだ。老人たちは、殆ど香辛料漬けの日々を送っているといつてもいいかもしれない。でも、この時ばかりが感じた感覚はそういつた能力とは関係のない、もつと現実的な認識だった。自然公園の入り組んだ遊歩道は延べで5マイルほどの距離になる。ぼくは40分かけて1周し、再び東屋に戻ってきた。

裕子はいなかった。

ベンチの上には編みかけの靴下が置かれている。東の間思案を巡らし、結局最初に走り出した小径に向かってぼくは歩いた。

梢を渡る風が葉を揺らし、静かな音を奏でる。ぼくは湿った落ち葉を踏み締めながら、さらに奥へ向かった。

やがて、深緑の薄明の中に佇むひとりの少女の姿をぼくはとらえた。奇妙な既視感だった。

繰り返される記憶。

彼女はひだ飾りの付いたミニスカートをはいいていた。いわゆるラーラースカートとい

うやつだ。それにコトンのトレーナー。そして、直線的な2本の脚。

何故だか、ぼくは唐突に狂おしいほどの喪失感に襲われた。

裕子が振り向いた。

彼女はいたずらを見つかった子供のように、怒っているような泣いているような、なんとも奇妙な表情でぼくを見た。

ぼくは駆け寄ると、何も言わずにいきなり裕子を抱きしめた。

「悟……」

彼女が驚きと戸惑いに震える声でぼくの名を呼んだ。

「どうしたの？」

「うん」

裕子の背中つて、こんなに薄かったっけ？

ぼくは悲しくなって彼女を抱く腕にさらに力を込めた。

「悟？」

「うん。何でもないんだ」

「そう？」

「うん」

裕子はぼくをいろんな呼び方で呼ぶ。

「悟」「井上くん」「あなた」

彼女は無意識のうちに使い分けてるみたいだけど、ぼくはそれがどんな感情と結びついているのだろうか、いつも考える。結局、そこに法則を見いだすのは難しいと、ぼくは考えることをやめてしまうのだけれど、この時裕子が漏らした「悟」という言葉は、もしかしたら彼女の涙と同じくらい悲しい感情と結びついていたのかもしれない。

「あそこで何をしたの？」

帰りの道すがら、ぼくは裕子に訊いてみた。

「うん——何だか、一人で待ってたら、急に不安になって——」

それで、と彼女は小声になり、

「悟のこと探して、ずっと歩いてたの」

そう、消え入りそうな声で続けた。

「子供みたいだなあ」

「悟はどうして？」

「うん？」

「私のことを抱きしめたりしたの？」

どうしてだろう？

何故、あの時ぼくは彼女を失うと予感したのだろうか？

「よくわからないよ」

ぼくは言った。

「裕子を見た瞬間、初めてあの森で出逢ったときの記憶が甦って——」  
そして、ぼくは透明な法則に導かれて、あの予感に辿り着いたのだ。だが、その道のりを見定めることは出来ない。

「やっぱり、よくわからない」

「変な人ね」

裕子はそれでも、何だか嬉しそうににこやかに笑っていた。

## 7

裕子が自分の身を抱くようにしてぼくを睨んでいる。

下着姿の彼女は寒さに白い肌を粟立たせていた。

外では6月の冷たい雨が細い銀の糸のように降り注いでいる。

「早く、お願いだから」

ぼくは腕組みをして、じっと彼女を見つめた。

「悪趣味よ、そういうのって」

「いや、純然たる観察行為だよ。他意はない」

そう言いながら、ぼくは腕組みをほどいて、彼女に歩み寄った。

「見た感じは変わりはないんだけど——」

ぼくは、まず裕子の腰回りから測り始めた。毎日の習慣なので手際に澱みはない。

ぼくの読み上げた数字をノートに書き込んでいた裕子が顔を曇らせた。

「やっぱり、減っている」

「そう？」

ぼくは彼女からノートを受け取った。

「毎日増減はあるけど、一ヶ月前と比べるとはつきりとサイズが小さくなっているのがわかるわ」

「確かにそうだね」

彼女はデニムのジーンズを引き上げると、足下のシャツを拾い上げた。

「今度は身長をお願い」

彼女はキッチンに移ると、食器棚を背にして立った。アパートゆえ、壁や柱に傷を付けるわけにもいかず、ぼくらは食器棚の横板にマーカーで印を付けるようにして身長を記録していた。

「157・2cmだね」

「ぼくの言葉に裕子が重い溜息を吐いた。  
「これじゃあ、18の時の身長と同じだわ……」

何気ない言葉だったが、それはぼくの中で混沌と渦巻いていた思いと見事に呼応した。  
「そうだ、その頃のサイズがわかるものって、何かあるかな？」

裕子は少しの間考えるように宙を見つめていたが、

「あると思う。新体操をやったときの練習日誌に多分書き残していたような気がする」  
そう言って、奥の部屋に引込んだ。

しばらくして、彼女は数冊のノートを手にして戻ってきた。

「ここに——」

そう言って彼女はノートを開き、一枚のページをぼくに示した。

「18歳の9月の記録があるんだけど——」

「まさしく、157・2cmだね」

「ええ」

「他のサイズは？」

「気味が悪いくらい一緒なの」

確かに全てのサイズが数mmの違いはあるものの、見事に一致していた。  
やっぱり、とぼくは心の中で呟いた。

——あの時感じた既視感——

「つまり——裕子は今、18の頃の自分に戻ってしまったということだよね」

彼女は自分の知らない言葉を聞いた人間みたいに、曖昧な表情でぼくを見た。

「だから、たんに背が低くなったとか、身体が痩せたとか、そういうことじゃなくて、裕子は今、成長の逆の過程を辿っているんだ——」

「私、若返ったの？」

「そういうことだと思う」

ぼくは彼女の手を引いてクローゼットの前まで連れていった。

「見てごらん。身体は細くなったのに、顔は前よりふっくらしている。これは高校の頃の裕子の顔だよ」

女性10代の終わり頃から少女の名残を脱ぎ捨てるように、その面立ちを変えていく。頬のふくらみが消え、あごの線が鋭角的になっていく。裕子も他の少女たちと同じ道を辿りながら、大人の女性の顔立ちになっていったのだ。だが、今鏡の中にあるのは、大人でもなく少女でもない、名前のない季節の中にいるひとりの女性の姿だった。

彼女は5年ぶりに再会した双子の妹を見るような、奇妙に熱のこもった眼差しで鏡を見つめていた。

「そう、これは確かに18の時の私かもしれない」

裕子は神託を告げる司祭のように、ひどく重々しい口調でそう言った。

「でも——何故？」

そう訊かれても、ぼくは明確な答えなど持ち合わせてはいなかった。

「多分——」

それでもぼくは知識の棚の奥からなんとか言葉を見つけたし、それを口にしてみた。

「それは、ホルモンの関係だと思う」

「ホルモン？」

「うん。成長ホルモンの負の効用というのかな——」

もちろん、口から出任せだったが、ぼくは何とか彼女の身に起こったことを現実的に解釈したかったのだ。

でも、この時、多分二人は既に真実の輪郭を、その手で感じ取っていたのかもしれない。つまり、この出来事が、病理学的分野に属するというより、神話的世界の範疇に在るのだということを。それは肉体の謎ではなく、時間の謎に関係する何かだった。

それでもぼくは現実世界のしっぽにしがみつこうように、これが疾病の一種であるという説にこだわった。そしていやがる裕子を説き伏せて、数日中に一緒に病院に行くという約束を取りつけたのだった。

「その前に」と裕子があった。

「今日、一緒に行って欲しいところがあるの」

「いいよ。何処に行くの？」

「買い物よ」

ふむ、とぼくは頷いた。

「何を買うの？」

裕子は少しためらった後、

「ブラジャーが欲しいの」と小さな声で言った。

「今、持っているのはどれも大きすぎて、すごく落ち着かないの」

ぼくは広すぎる部屋で、所在なさげに俯いている裕子のささやかな乳房を思い浮かべた。

「それはきつと随分と居心地の悪いことなんだろうね？」

「そう、男の人にはわかりづらいでしょうけど」

そういうことで、ぼくらは町外れにあるショッピングセンターに行き、新しいブラジャーを2枚と、7号サイズのスカートを購入したのだった。

その週の金曜日、ぼくらは電車に乗って隣町にある総合病院に出掛けた。

駅から病院に向かう道の両側には、大きなポプラの木が巨人の衛兵のように連なり、

歩道に濃い影を落としていた。

並んで歩く裕子の頭の頂を見下ろしながら、以前と比べて明らかに彼女の背が低くなっているという事実、ぼくはちよつとショックを受けていた。

黒い髪わけめからのぞく青白い地肌。

以前はその色に気付くこともなかった。

「裕子は18を過ぎてからも背が伸びていたんだ？」

「そうね。私すごい奥手だったから——大学卒業してからも、まだ少しづつ伸びていたぐらいだから」

そう、確かに彼女は奥手な少女だった。15の春になってさえも、まだ彼女はその年頃にあるべきはずの何かが欠け、場違いな部屋に迷い込んだ子供のように見えていたのだから。

「高校に入学した頃はどれくらいだった？」

「152か3しかなかったんじゃないかしら」

ぼくは記憶の箱からその頃の裕子の姿を取りだしてみる。だが、彼女はいつもぼくに背を向け、椅子に腰掛けているので、その背がどれくらいだったのかを思い浮かべるのはひどく難しい。

「そんなに小さかったっけ？」

「ええ、そうよ」

「なんだか不思議な感じだなあ……」

「井上君は、もうその頃から今と同じ身長だったんでしょ？」

「そうだね。中学を卒業した頃に177になって、それからずっとそのままだよ。裕子と違って早熟なたちなんだ」

「そう——だとすると、出会った頃は25cmも身長差があったのね。——きつと、キスをするのに苦労したでしょうね」

「——多分——。でも、ちよつと想像出来ないな」

「何が？」

「15のぼくたちがキスをしている姿」

「うん、そうね——けど——何だが、とっても損をした気分」

「だって、私たちが初めてキスしたのは18の時でしょ？ でも、きつと15には15の時にしか出来ないキスがあったはずだもの」

ぼくは15のキスというものをちよつと想像してみた。

それは確かに18のキスとは何処か違い、痛々しいぐらいにぎこちなく、そして精一杯の真剣さに満ちていた。

「そうだね。せっかく出逢っていたんだから、一回ぐらいキスしておけばよかったな」  
15の裕子とのキス。

それはぼくを不思議な力で魅了した。

## 8

病院に着くと、まずぼくらは受付で、どこの科に診てもらうかを決めなければならなかった。

ホテルのロビーみたいにぴかぴかに磨き上げられた新建材の床や壁は、そこが病院であることをぼくらに忘れさせる効果があった。

〃ここは死や病とは無縁な場所なのです〃

合皮革のソファーに腰を下ろし、二人は受付カウンターの upper に表示されている幾つものパネルを眺めた。消化器科、形成外科、呼吸器科、産婦人科、循環器科、神経科、麻酔科、第一内科、第二内科、第三内科――

消去法で関係の無さそうなものから消していき、最後に残ったのが産婦人科と内科だった。ホルモンと言えば、それは何かしら婦人科系の疾病を思わせたし、内科は、そういういたものを含めて、人間の体の中で起こる化学反応の全てを扱う分野のように感じられた。

「どうする？」

「うん」

「まあ、無難なのは内科だろうけど」

「じゃあ、そうしましょう」

裕子は硬い表情で正面を見据えたまま頷いた。

ぼくは受付を済ますと、打ち出された番号札を持って再び裕子のもとに戻った。

「215番だ」

ぼくは裕子に札を見せた。

「それは、つまり今日、この時間までに内科の受付を済ませた人数を示しているの？」

「そうだと思うよ」

「すごい数ね」

「ああ」とぼくは頷いた。

「世の中は病に満ちている」

「そう？」

「そう。病は人の数よりも多いんだから」

「そんなことって、あるのかしら？」

「あるよ――つまり、結膜炎を患いながら、同時に中耳炎に苦しんでる人もいるってことさ」

「それは——何だか、とても辛そうね」  
「だろうね」

そうは言ったものの、確かに診察を待つ人間の数はうんざりするほど多かった。バスケットが出来そうなくらい待合室は広かったが、そこに並ぶ長椅子は身体に何らかの不具合を抱えた人々で全て埋まっていた。

一時間ほど過ぎたところで、ぼくは隣に座る裕子に囁いた。

「何だか、ここにしていると旧体制の頃のロシアを思い浮かべてしまうな」

「どうして？」

「ロシア人って食べるものや着るものを得るために、長い長い行列を作るよね。そして、自分の順番が来るのを辛抱強く待ち続けている」

「そう？」

「ああ。計ってみたら平均的なロシア人は人生の半分近くを待つことに費やしている。たっという話だよ」

「それは何かのジョーク？」

「いや、真実さ」

暫くしてから裕子が言った。

「でも、私たちだって似たようなものだよ」

「どういうこと？」

「私たちだって、人生の多くの時間を何かを待つことに費やしているんじゃないかしら」

「たとえば生まれてくるはずの赤ん坊とか？」

「ええ、そうね、そう」

更に10分が過ぎた。

電光で表示されるナンバーは、ぼくらがようやく中間地点を過ぎたことを示していた。

「ボルシエビキ——」

「えっ、何？」

「いや、ボルシエビキって何のことだっけ？ ロシアの話をしたら、さっきから頭に浮かんで離れないんだよ」

「さあ——政党の名前かなんかじゃなかったかしら？ レーニンとか10月革命とか、その頃の話よ、確か」

ふむ。

「私たち世界史はフランス革命までしかやらなかったでしょ？ その後のことはうる覚えだよ」

「そうだ。あの世界史の先生——いつも話が脱線して、授業がいつの間にか中世文学概論になっちゃうおじいさん。何て名前だったっけ？」

裕子が愉快そうに微笑みながら、

「私は憶えているけど、教えない。思い出してみて」

「そんな……」

「あなたのためよ。今のうちから健忘症にはなりたくないでしょ？」

ほくは唸りながら、冷蔵庫の下に入り込んだボタンを手探りで探すようなもどかしさで記憶を辿った。

「——うん。確か何かの病気の名前と関係してるんだ」

裕子は、ほくの言葉に一瞬不思議そうな顔をした。そして、しばらく考えてから、その意味に気付き、目を細め鼻にしわを寄せた。

「確かにそうだけど、それはあまり品のいい連想とは言えないわね。先生が可哀相だわ」

「そうなの？」

「ええ」

ほくは再び記憶を辿ろうと宙を見据えた。

「——そう、何かの感染症だったような気がする。何だろう？ クラスのみんながよく笑い話にしてたんだ」

そして、次の瞬間、唐突にその名前は甦った。

「倉宮だ。倉宮先生」

「そうよ」

クラスの連中は、この初老の教師の名前とクラミジア感染症との相似性に気づき、よくそれをネタに冗談を言い合っていた。

『クラミヤがクラミジアだってさ』

確かに品がないし、ネタにされる本人が可哀相だ。

ほくは性病との連想でしか、その名前を思い出してもらえない男の人生というものを、少しの間考えた。

そして、裕子に言った。

「そう、幾つかの欠点はある人だったけど（19世紀の壁を越えられなかった彼の世界史）、それでもいい人だったと思うよ、あの先生は」

「私もそう思うわ」

## 9

2時間35分待ち続け、ようやく電光掲示板が2115に変わった。

「どうする？ ぼくも一緒に行こうか？」

「ううん、大丈夫よ。私一人で行って来る」

「ちゃんと説明出来る？」

「ええ」

裕子は椅子から立ち上がると、第一内科の表示がある部屋に入っていった。

残されたぼくは、長椅子の隣に置かれたマガジンラックから一冊の雑誌を取り出した。それは随分と古びた『リーダーズ・ダイジェスト』だった。ぼくはその中に書かれた、親とはぐれた皇帝ペンギンの雛の話を読むことにした。

だが、数ページも読み進まないうちに、裕子が戻ってきた。

「ずいぶん早いね。もう終わったの？」

裕子はかぶりを振り、

「これから検査。尿を採って、それから採血室で血を採って、その後レントゲン室で骨の写真を撮るの」

「先生は何て？」

「ううん、何だかいろいろ言われたけど、良くわからないの。甲状腺がどうだとか、脳下垂体とSHTがどうしたんだとか——」

「結局は検査の結果待ちってことなんだろうな」

「そうね——じゃあ、行って来るわ」

「うん」

裕子は手に持った紙コップをひらひらさせて、につこりと微笑むとレストルームに消えていった。

というわけで、結局この日は何の結論を得ることも出来ず、全ては検査の結果が出る翌週の金曜に持ち越されることになった。

## 10

「検査の結果は全て陰性でした」

医者は、ぼくの顔を見てにつこり微笑んだ。

「奥さんの身体に異常はありません」

その医者はひじょうに端正な顔立ちをしていた。そのために、何だか本物の医者に見えないで、ぼくは好感度1位の俳優が巧みな演技をしているんだという印象をどうしても拭うことが出来ずにいた。したがって、彼の口から出る言葉も、どこか科白めいて嘘くさく聞こえた。

「体のサイズが小さくなられたということですが——」

ここで医者は視線を裕子に移し、

「無理なダイエットなど、なさってはいませんか？」  
裕子は無表情のまま2、3度小さくかぶりを振った。

「してません」

「そう」

医者は大きく頷いた。

「それでは、最近、生活環境が変わったようなことは？」

「この春から仕事の量は増えてます」

「ご職業は確か——」

「ダンスのインストラクターです」

「そう、そうでした」

医者はカルテに何か書き込み、再びぼくらに向き直ると、右の手の平を上に向け、何かを持ち上げるような仕種をした。

ハリウッド的身振り。

「つまりは、そういうことです。摂取カロリーと消費カロリーの数式で説明出来る。病気ではありません」

「でも先生」とぼくは言った。

「彼女の場合、身長も縮んじやってるんですよ」

「それには様々な説明が出来ると思います」

医者は左手の中指をこめかみに当て、微かに首を傾けた。

「身長には日変化というものがあります。朝と夕では数値が変わりますし、加齢や無理な運動によって脊柱の椎骨と椎骨の間が詰まってくることもある。女性だったら、髪をアップにするか、下ろしているかによつたって随分と違ってくるでしょう？」

彼の言葉は充分予測されたことだし、結局ぼくらは最初から何も期待していなかったのだ。

「わかりました」

ぼくは裕子を促し立ち上がった。

「気になるようでしたら」

医者はデスクトレイから一枚の用紙を手に取り、ぼくに差し出した。

「この表に毎日測定した数値を書き込んで、一ヶ月後にまた来て下さい」  
ぼくは受け取ると、それを折り畳んで胸ポケットにしまった。

「わかりました。そうします」

何だか、ここで握手でもしそうな感じがしたが、勿論そんなことはないまま、ぼくらは部屋の外に出た。

「何だか説得力の無い医者だったなあ」

ぼくが言うと、裕子がぐくすと笑って、

「私、何だかポテトチップスを食べながら、部屋でビデオを見ているような気分になっちゃったわ」

「そうだね、そんな感じ。二枚目すぎるというのも一種の職業的障害になりうるんだなあ……」

でも——と裕子は言って、

「あるタイプの女性には、逆に大きな効用となるんじゃないかしら」

「そう？」

「ええ」

「裕子も？」

彼女は、わかるでしょ？ という顔でぼくを見た。

「だから、そういう女性は、私とは対極のエリアにいる人たちのよ」

そして、私の嗜好はごく少数派に属するの、と付け加えた。

「ごく少数派の嗜好の対象に選ばれたのが、ぼくっていうわけか——」

「あなたは独特だから」

彼女はそう言いながら歩道の小石を蹴飛ばした。

裕子のいつも歩くときの癖だ。だから、彼女のパンプスのつま先は、どれもみなささくれ立っている。

「でも高校の時、井上君のこと好きだったっていうこ、結構いたのよ」

それは意外な事実だったので、ぼくは少し驚いた。

「ちよつと信じられないなあ。告白されたことも一度もないし」

「控えめなが多かったから——心の中にある自分の想いを育てていくことで精一杯なのよ。そこから先は神様の気まぐれに頼るしかないの」

「でも、そういうこが恋を成就するというのは、とても難しいことなんじゃないかな？」

「そうね、そうかもしれない。結ばれる恋の何倍もの片思いで世の中は一杯なのね」

「そう——世の中は片思いに満ちている」

そして、とぼくは続けた。

「妥協や打算で結ばれる男と女の数は、それよりも遥かに多い」

「そうなの？」

「わかんないよ。数えたわけじゃないから。言ってみただけさ」

なーんだ、と裕子は吹き、小石を一つ蹴飛ばした。

## 11

夏も盛りを過ぎた頃、裕子はもうすでに大人の女性ではなくなっていた。

身長は154 cmになり、胸はさらに薄く、腰は少年のように細くなっていた。

顔は——そう、これが一番不思議な変化だったのだけれど、まさしく、裕子の顔は16

歳の少女の面立ちに舞い戻っていた。高校2年の秋、修学旅行のスナップ写真の中で微笑む裕子と、今ほどの目の前で小石を蹴飛ばしている裕子の間にある時の隔たりは、ほんの3日とか4日とか、そんな程度のものでしかないように思えるのだった。もはや裕子が23歳の成人女性であるという事実は、その内面の窓である言葉や素振りからでしか、伺い知ることが出来なくなっていた。

「今日、チーフと呼ばれて言われたの」

ほくらは涼をとるため、アパートの裏手にある用水路の土手を歩いていった。数匹の螢が、安物の電飾のように、ちっぼけな灯りを弱々しく明滅させていた。

「何て？」

彼女に蹴飛ばされた小石が街灯の光の外に消えていくのを、ほくはじっと見つめていた。

「うん。何か最近ずいぶんと痩せて印象が変わったみたいだけど、身体の方は大丈夫なのか、って訊かれた」

「印象が変わった」という言葉は、実際の裕子の変化を目の当たりにした人間としては、かなり控えめな表現だと思う。適切な言葉を選ぶならば、まるで別人のようになった、と言うべきだろう。

「今、急に休まれたりすると代行のインストラクターを探すのがとても大変なの。だから、チーフもクラスに穴が開いちゃうのを心配してるみたい」

それで？ とほくは彼女に訊いた。

「チーフには何て答えたの？」

「一応、『大丈夫です、ちょっと生活のリズムが変わって痩せただけですから』って答えたんだけど——」

でも、と裕子は続けて、

「もう限界みたい……」

それは、何かしら一つの転機を告げる、彼女の大きな溜息のように聞こえた。

「限界？」

裕子は無言で頷き、

「スタッフや会員のひとたちは、みんな私の背がこんなに低くなったことを凄く不思議に思ってるみたい」

「まあ、7cmも縮んじやったんだから、誰もが奇妙に思うだろうね」

「そうね。何て言うのかしら、みんなの視線をいつも感じるの。私がその場にいるだけで、空気が固まっちゃうのよ」

透明な水にカタクリの粉を流し込むように、澱みのない空間に疑念や好奇の意識が注がれてゆく——

「多分、これから先、もっとみんなを混乱させてしまうし、私自身もきつと辛くなって

いくだろうから——」

「そう？」

「うん。だから、この変化が治まるまで、しばらくの間、仕事を休ませてもらうかと思つて」

——しばらくのあいだ——それは、いつまでのことなのだろう？

ぼくは、これまでずっと心の中で問い続けてきた言葉を、今また思い起こした。

「何故？そして、何処へ？」

裕子は、どうしてこんなふうになつてしまつたんだろう？

彼女は一体、どうなつてしまふんだろう？

「もしかしたら」

裕子が言った。

「もう、この仕事に戻れる日なんて来ないのかも知れないけど——」

そんなことないよ、とぼくは言いたかった。けれど、ぼくは思つていないことを口に

出来る人間では無かつたから、ただ黙つたまま、自分の足下を見つめていた。

「何で——こんなふうになつちやつたんだろう……」

それは、ドライブの日の雨を嘆くような口調だつたけれど、裕子が今までずっと気丈に抑え続けてきた嘆息の欠片が零れ出た瞬間だった。

ぼくは裕子の苦しみを思い、それ故に愛おしさをいつそう募らせた。

「理由はわからないけど」

ぼくは自分の言葉が真実となることを願いながら言った。

「いくらなんでも、こんな奇妙なことがいつまでも続くわけ、無いと思う」

「そうかしら？」

「うん。そう遠くないうちに、この若返り現象も治まっていくんじゃないかな」

そうね、そうだいいけど、と裕子が呟いた。彼女は再び道端の小石をこつんと蹴飛ばした。石は用水路に飛び込み、ぽちゃんと小さな音を立てた。

「もしも」

裕子が言った。

「もしも、このまま、この状態がいつまでも続いていくとしたら、私どうなっちゃうのかな？」

それはとても意地の悪い質問のように感じられた。彼女は本当にその答えをぼくの口

から言わせたいと思っているのだろうか？　ぼくは答えたくないし、そんな結末、考えたくもなかった。

「わたし——10歳になって、5歳になって——そして、赤ちゃんになって、それから——」  
 ぼくは彼女の言葉が聞こえないふりをして、そのまま歩いていこうとした。だが、ふと気付くと、裕子はぼくのシャツの裾をしつかりと握りしめ、そして俯き身体を震わせていた。

「いかないで……」

ぼくは、ゆつくりと振り向き、震えている彼女の細い腕をとった。

彼女は握りしめていたシャツを放し、ぼくの胸に身を預けた。

「たとえ——一番悪い結末が待っているとしても、最期まで見届けて。お願いだから」  
 ぼくは身を屈め、自分の額を彼女の額に合わせた。

そう——目を逸らすわけにはいかないんだ。

何故なら、これは他の誰でもない、ぼくの裕子の身に起きたことなのだから。  
 ぼくは言った。

「もう、医者に診てもらうつもりはないんだね？」

裕子が頷くのを、ぼくは自分の額で感じた。

「わかった。じゃあ、ぼくがひとりですつと見守っていくよ。たとえ、どんな結末が待っているとしても」

彼女の涙がぼくの頬を伝い、流れ落ちていった。

「だって、なんといっても、きみはぼくの奥さんだから——」

ありがとう、と裕子が小さく呟いた。

## 12

9月になり、空がますます、高く透明になっていく頃、裕子は3年間続けてきたインストラクターの職を退いた。それは例えば、ブラジャーのサイズが一つ小さくなったとか、蛍光灯の紐に手が届かなくなった、そういったことは違って、もともと裕子の根元的なこと、彼女の世界が一回り小の一つだった。

本来なら、彼女はもつと落ち込んで、だって、彼女は本当にあの仕事が好きで、踊ること。その楽しさを人々に伝え

サンプルはここまで

つてもおかしくはなかったはずだ。  
 ったから。  
 くこと。

しかし、彼女は少なくとも外見上は、まるで変わらなく振る舞い続けていた。外に出て働く代わりに、家の中に仕事を見だし、それに自らの空白を割り当てていった。その結果、